

# 第12回桃山学院大学図書館書評賞受賞作一覧

## 【優秀書評賞】

東 紫苑（国際教養学部 3 年次生）

「はじめてのエシカル 人、自然、未来にやさしい暮らしかた」

末吉 里花／山川出版社(2016 年)

## 【 佳作 】

崎山 和輝（経済学部 3 年次生）

「君の臍臓をたべたい」

住野 よる／双葉社(2015 年)

八家 崇文（経済学部 3 年次生）

「原爆供養塔 忘れられた遺骨の 70 年」

堀川 恵子／文藝春秋(2015 年)

金岡 亮佑（国際教養学部 3 年次生）

「ネコがメディアを支配する」

奥村 倫弘／中央公論新社(2017 年)

## 【 総合講評 】

図書館長 法学部教授 瀧澤 仁唱

『ハリー・ポッター』は、シングルマザーとして生活保護を受けつつ物語を書いていた J・K・ローリングが発表したとたん、あっというまに世界的ベストセラーとなった。映画や種々の産業の基となったし、なり続けている。この物語を生み出すまでに彼女は多くの知識を先人の書籍から学び、あれだけの深みのある作品は生み出した。子どもだけでなく、大人も楽しめる物語となっているのはそのせいである。字面(じづら)だけおっても内容は理解できようが、一つ一つのシーンに意味があることを知るには、読者にも知識がいる。本を読めば、今まで自分の知らなかった先人の知恵を簡単に自分のものにできるし、行ったことのない場所にも行けるし、はるか昔や絶対に見ることが

できない未来へも旅できる。しかし、限られた人生で、すべての本を読むことはできず、その一つの導きとなるのが書評である。

今年の書評賞の応募件数は、35 件であった(書式設定等の不備により審査対象外になったもの 11 件)。応募方法に不適合な書評の域に達しないもの、本の紹介や単なる感想文も多くあった。ネット社会で横行している剽窃(コピペ)がないか点検したのは、図書館事務課員の作業によるところが大きい。受賞作品の最終選考では、その本の内容を逐一照らし合わせ、書評が妥当か図書館委員が点検した。

今年の入選は、優秀賞が 1 点および佳作 3 点であった。

優秀賞は、末吉里花『はじめてのエシカル 人、自然、未来にやさしい暮らしかた』(山川出版社、2016 年)である。我々が日ごろ安く大量に消費し

ている商品の材料となるもの(例えば綿花)を収穫したり、作ったりするのに信じられない数の子どもたちが働いていたり、環境破壊が行われている現実がある。しかし、我々と生産者などとの間には「壁」があってそれが見えなくなっており、それを知らずに我々は大量の消費を楽しんでいるという認識からこの本は出発する。その「壁の向こう側」の厳しい現実には戸惑いを感じながらも、無理をせずにやれる範囲で「エシカルに」暮らすという本書の提案に、強い共感を持って書評が書かれている。内容を要領よく適切に紹介したうえで、評者は、素直な気持ちで、自分自身の生活を少しでも改善していこうという意識と、より多くの人々に「エシカル」を知ってもらいたいという著者と共通の願いを叙述している。読むものに好感を抱かせる書評といえるが、欲を言えば、独自の意見がほとんど見られない点が残念である。

佳作は以下の三点である。

(1) 住野よる『君の臍臓をたべたい』(双葉社、2015年)

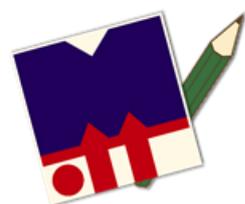
「臍臓」(すいぞう)を「たべたい」というタイトルに興味を持った人に、この小説を読むことへの後押しをしてくれる書評だが、書店の手書きポップのような印象もある。なぜなら、ストーリーの評価やそこから感じ得た感想的なものは記述されているが、小説としての文章表現に関する評価がないからと思われる。実際にこの小説が登場人物の主に二人の台詞がずっと交互に続く書き方ですすめており、細かな情景描写などはほとんどないからと思われるが、筆者の小説家としての特長や能力の限界を評せずにはいられないように思う。小説の中で起こる出来事をふまえて、読んで見たいな気持ちを掻き立てるように要点を整理しているところは、うまく書けている。特に、評者自身の読後の変化としてあげている「思ったことを言葉にして伝えるようになった」という点は、主人公の二人が自分の気持ちを言葉にしてお互いに投げかけていくことでテンポよく進行していくこの小説を読んだ後だと、そういう気持ちの変化が起こるだろうと納得できる。評者は、この小説を「恋愛小説」と言い切っているが、疑問に感じる。評者は、書評の最後の部分で、「そこに何らかの意味を汲み取ることができたらもっと納得のいく結末になったのだが、それを理解することができなかった。」と述べている。そこにある意味こそが、恋愛小説という枠組みにおさまきれないこの小説の重要な部分であるようにも思われる。

(2) 堀川恵子『原爆供養塔 忘れられた遺骨の70年』(文藝春秋、2015年)

広島市や国は、臭いものに蓋をするかのように、原爆供養塔、闘う墓守の佐伯敏子さん、平和記念公園のコンクリートの下の色街、そのコンクリートの下に今も眠っておられる、朝鮮半島出身者、中国人も含め、何万もの方々を人目から隠してきた。ある朝、突然、放射能の何万度もの熱で一瞬にして黒焦げとなり、異常気圧で頭部が倍近く腫れ上がり、眼球が飛び出てぶら下がり、皮膚が溶けて垂れ下がる。「平和記念公園」は、本当は「地獄公園」というくぐり込みは衝撃である。書評の冒頭のうまいつかみで、しっかりつかまれた。本の中で紹介されている「正義の戦争より不正義の平和の方がまし」という言葉は重い。戦争の善悪、是非どころではない。書評の点検時に本書を読みながら数回泣いた。

(3) 奥村倫弘『「ネコがメディアを支配する ネットニュースに未来はあるのか」』(中央公論新社、2017年)

全体としては内容がうまくまとめられており、対象図書に興味を抱かせる書評となっている。特に、この本の売りと思われるタイトルの「ネコがメディアを支配する」とは一体どういった意味か、という点についてしっかりと言及出来ているところは良かった。ただ、「ネコがメディアを支配する」、すなわちネットメディア上に質の低いコンテンツが氾濫し、重要なニュースが駆逐されつつある現状が生じた理由についてはもう少し詳しく記述すべきであろう。書評では、ネットメディアの退化の要因として広告収入依存型のビジネスモデルに言及しているが、その背景として人間が生来備えている感性と利益最大化の経済原理が作用しているが故に問題の解決が一筋縄ではいかない点についても記述してほしい。



## 【 優秀書評賞 】

「はじめてのエシカル: 人、自然、未来にやさしい暮らしかた」

東 紫苑(国際教養学部 3 年次生)

毎日身に付けるものや食べるものが、生産者や地球の環境にどのような影響を与えるか考えたことがあるだろうか。常に環境に配慮して生活している人は少ないかもしれない。本書の主な内容は、地球や人が抱える様々な問題と、私たちにできる「エシカル」な暮らしかたについてである。書名にもあるエシカルとは、辞書では「倫理的な」や「道徳的な」という意味だが、本書では「私たちの良心と結びついていて、人や社会、環境に配慮されている」ということであると言い換えている。著者である末吉里花氏は、一般社団法人エシカル協会代表理事であり、フリーアナウンサーでもある。テレビ番組「世界ふしぎ発見！」で、ミステリーハンターとして世界各地の秘境を訪れた。その経験から自然の偉大さを感じるとともに危機を知り、問題の解決につながる活動をしようと決めたことが、後にエシカル協会を立ち上げるきっかけである。

本書は 5 章で構成されていて、第 1 章は暮らしの中で身近なものを例に挙げて、エシカルな商品について説明している。私たちは当たり前のように安い服を買うが、その背景には低賃金で悲惨な労働環境に苦しむ人々がいると知った。まずは「当たり前」の壁の向こう側を知ること、影響をしっかりと考えることがエシカルな暮らしをするうえで大切だと述べている。第 2 章は地球の環境や動植物の問題と、私たち人間との関わりについてである。特に先進国は地球の資源を多く使っているため、私たちの行動と選択の積み重ねが未来につながる。第 3 章では、著者がエシカルと出会うまでとそれからの活動、そしてエシカル消費について述べている。エシカル消費とは環境、人、社会、地域に配慮して作られたものを買うことで、途上国や過疎化が進む地域を応援するなど、日本が抱える問題も解決できる手段である。売り手よし、買い手よし、世間よしの「三方よし」に、作り手よし、未来よしを加えた「五方よし」がエシカルの世界観であり、目指す理想の形だとしている。第 4 章では、具体的にエシカルな暮らしを私たちがどのように始められるかについてと、エシカル商品を見極めるうえで助けとなる認証マークを紹介している。また個人の消費は GDP(国内総生産)の中で 6 割を占めていることから私たちの選択は

とても重要であることを明らかにしている。第 5 章では 1 人の一歩と伝えることの大切さについて述べている。特に現代はインターネットが普及し、SNS での発信は大きな影響力がある。周りの人だけでなく、企業にも消費者の声を届けることができる時代である。伝えられた誰かが現状を知り、エシカルに興味を持つことで一歩はさらに大きくなる。

本書の良い点は、著者が実際に見た現状を述べているため、説得力がある点だ。著者も最初は、本書を初めて読んだ私と同じ衝撃を受けて戸惑っていたことがわかり、親近感を持つことができた。私は本書を読むまで、当たり前前の壁の向こう側を考えたことはなかった。第 1 章を読んだときは安い服を買うことはいけないことのように感じた。しかし私たち消費者の行動により少しずつではあるが生産工場の現状は変えられると知り、持っているものをより大切に使うと前向きに考えられた。私が本書を読むきっかけとなった人は「たとえば環境に配慮して飛行機に乗らないのは、旅行ができないからつらい。自分の幸せは確保しつつ、できる範囲で最善の選択をしたい。」と話してくれた。私の選択としては、家庭用洗剤を環境にやさしいものにして、「私にいい」が「世界にいい」とつながることを考えると、変化が目には見えなくても使っていて気持ちが良い。大切な人への贈り物にエシカル商品を選ぶのも素敵な選択である。

エシカルという概念だけを押し付けるのではなく、私たちができる範囲での解決につながる一歩をあらゆる方面から示している点も良い。こまめに電気を消すことやゴミをできるだけ減らすことも、エシカルな暮らしと言える。難しく考えず、日常生活の少しの意識から始めることができるという提案はわかりやすい。各章の終わりには著者が思うエシカルの在り方や、エシカルな暮らしをするうえでの疑問に対しても答えている。著者の願いは、「エシカル」が教科書に載り、幼いころから学べるようになることである。誰しも「知ること」から始まる。私たちの生活は自然だけでなく、遠くの人とも深く関わっているということを、本書を読んで改めて感じてほしい。



## 【佳作】

### 「君の臍臓をたべたい」

崎山 和輝(経済学部3年次生)

小説を選ぶ上で何に一番の焦点を置き選ぶだろうか。例えば、「タイトル」。タイトルというのは、作家が一番伝えたいこと、その本を簡単にまとめた言葉となることが多い。他にもその本の始まりの文、好きな作家から決めるなど理由は様々だろう。今回私がこの本を選んだ理由は、一つ目の例に挙げた「タイトル」だ。この謎めいたタイトルに惹かれ、私はこの本を読むことに決めた。

小説を読み終わった後、タイトルを振り返ってみると「あ、なるほど」と納得させられる。それを今まで読んできた本の中で一番感じさせられたのがこの本だ。タイトルだけでなく、内容も私に衝撃を与えた。主人公が死ぬことを最初に伝えるという斬新な始まり方だけでなく、もう1人の主人公の名前を伏せる(クラスメイト君、仲良し君というように)という変わった文章で話は続く。この本は、2人の男女の高校生が話のメインとなり話が進んでゆく。彼女は治ることがない重い臍臓の病にかかっている。しかし、普段はとても明るく、いつもクラスの中心にいる人気者で太陽のような存在だった。それに対し少年は、どこか不器用な性格で、人と関わることを避けて生きてきた。そんな交わる事のない陰と陽の2人を一冊の本が結びつけた。その本の名は『共闘文庫』。これは言わば、彼女の闘病生活の日記だった。その本を少年は病院でたまたま読んでしまう。そこから始まった2人の秘密の関係。彼女の秘密を知ってしまった少年は、彼女の唯一気の許せる存在に。それから少年は「彼女の死ぬ前にやりたいこと」に付き合わされることとなる。そうして縮まっていく2人の距離が綴られた恋愛小説だ。

最近の恋愛小説、映画といったようなものは、どれも同じような展開を見せていると思う。これは個人的意見だ。そんな考えを覆したのがこの一冊だった。最初からバッドエンドだとわかっている恋愛小説というのは珍しいのではないだろうか。そうした点からこの本に引き込まれる人は多いだろうと思う。

この本は色んな方に見てもらいたい。年代問わず共感できる部分が大いにある。大人になった今、そういった恋愛小説を読む機会は少なくなったかもしれない。だがもし自分の学生時代こういった子がいたら自分はどうしていただろう。また、親の立場に立つとこういった子を授かったら自分はど

うするのだろうかと考えてみてもいい。逆に今高校生の人達は、今の自分達と比べてみたりしても面白いかもしれない。恋している人、恋人がいる人達は、もし突然自分の好きな人、恋人がこういった難病になってしまったらどういった気持ちになるのか、どういったことを伝えたいか想像して読んでほしい。気持ちを伝えられないことがどれだけ苦しいものか分かるはずだ。

こういったように私は、年代は絞らず様々な方々に読んでいただけたらと思う。それほど素晴らしい作品だと感じた。しかし一点、恐縮ではあるが少し納得がいかなかった点を述べたい。それは彼女の最期のシーンだ。ネタバレの要素があるため多くを語ることはできないが、少しあつけなさというのを感じた。もちろん個人的な意見であり、他の人がどう感じるかどうかは全く別だ。だが、それを踏まえた上でも素晴らしい作品だと思う。

### 「原爆供養塔 忘れられた遺骨の70年」

八家 崇文(経済学部3年次生)

あなたは、広島県の平和記念公園の片隅にある小さな塚をご存じだろうか。小山のような塚はお椀を地面に伏せたような形をしており、古くからこれを知る人には「土饅頭」と呼ばれている。表面は芝生に覆われており、周囲には木々が生い茂っている。また、平和学習や観光のルートから少し外れているため、訪れる人は日中ほとんどいない。この「土饅頭」の正式な名称は、「原爆供養塔」という。さて、この「原爆供養塔」を語るうえで重要な人物が一人いる。佐伯敏子さんだ。一原爆供養塔に行けば、佐伯敏子さんに会える。1970年代も終わるころから、このような話が広島を訪れる人々の間で広まるようになっていった。土饅頭の周りを行ったり来たり、ごみを拾い竹ぼうきで掃いている。水を汲み、供えられた花を切り戻す喪服姿の小柄な女性。土饅頭の近くへ来た人をつかまえて、その説明をしていたおばあさんこそが、佐伯敏子さんである。佐伯敏子さん97歳、1919年12月24日広島緑井に生まれる。旧姓は茂曾路という。昭和30年(1995)、原爆供養塔が平和記念公園に再建された同年の8月6日から佐伯さんは遺書を書き始めた。この遺書は3人の息子に読まれるだけでなく、全国各地で読まれ佐伯さんの人生を大きく変えることになる。1998年に倒れて人前から姿を消すまで、およそ40年ものあいだ「原爆供養塔」に通い続けた。

原爆供養塔には地下室がある。10 畳ほどの小さな空間の壁一方にはかつて阿弥陀仏が置かれ、残りの三方には天井にまで届く棚があり、そこには人の骨が納められている。この地下室に遺骨として眠る人の数はおよそ 7 万人。小さな骨箱(現在は骨壺)には一人ひとりの遺骨が納められ名前や亡くなった場所、本籍地の町名などが書かれている。大きな箱には遺骨の山がひとまとめに納められている。佐伯さんは遺骨を家族のもとへと返す作業を続けてきた。しかし、名前や住所がわかっていながらも引き取り手が現れない遺骨がたくさんある。中には存在しない番地や名前があったり、祀られたはずの人が実は生きていたということも。ここにある遺骨は、被災地で亡くなった人のものだけではない。例えば被爆直後に、似島にある臨時救護所に運び込まれる予定だった人が、島の棧橋から救護所までの道程で亡くなり遺骨となった人もいる。ここにある名簿には、遺体処理をしていた当時の少年兵たちが息も絶え絶えになる人々から必死に書き取った情報が書き込まれている。

本書には、佐伯さんが遺骨の引き取り手を探し奮闘している様子や、著者が聞き取り調査などを行った様子が、対話を交えながらまた引用をしながら非常にわかりやすくまとめられている。聞き取り調査では佐伯さんからはじまり、当時の少年兵、また納骨名簿にある情報をもとに遺骨の引き取り手を探しているなかで出会った人々などが描かれている。また私たちが、直接は見えていない原爆投下当時の様子をイメージしやすい文章で描かれている。投下当日、広島市を離れていた佐伯さんが、戻ってくる際に道中で目にしたものの、耳で聞いたものは、私たちの想像をはるかに超えるような悲惨なものだと感じ取れる。また、亡くなった人たちがどのようにして処理され、名簿として残されたのか。本書を読めば今まで知らなかったことが多いと思い知らされるはずだ。

気になることがあるとすれば、今の日本の核武装をしようという動きがあることを批判しているように感じ取れる部分があるということだ。原爆の話伝えるものとしては、そうせざるを得ないのだろうが、あえて取り入れる必要はないように思う。

「原爆供養塔」、そこにある大量の遺骨はなぜ引き取り手が見つからないのか、佐伯敏子さんがなぜその場所の掃除をし、遺骨の引き取り手をさがして奮闘していたのか。「あの戦争の犠牲となって殺されていった人たちの存在を忘れてはならない」という佐伯さんの言葉にはどんな思いが込

められているのか。そして、佐伯さんの意志を継ぎその後を追った作者は何を目にしたのか—。

「ネコがメディアを支配する」

金岡 亮佑(国際教養学部 3 年次生)

私は奥村倫弘著「ネコがメディアを支配する」を読んだ。この本では、主にニュースを伝えることを主軸として、それに関するメディアの変遷と未来について記述されている。冒頭ではインターネットニュースがなぜ無料で読めるかという仕組みや、手軽にニュースを閲覧することができるようになったために、「ニュース」というコンテンツの幅が極端に広がり、誰かが撮影したかわいらしい猫の動画でさえニュースとなり、むしろそのようなニュースのほうが閲覧数も多く人気があるというのが現状であるということが述べられている。インターネットニュースを無料で読める仕組みというのは、ニュースサイト上に広告を置くことによりマネタイズができるようになったことにより、読者はお金を支払うことなく読むことができるようになったのである。しかし、その広告が掲載されているサイトの閲覧数、すなわち PV(ページビュー)数によってニュースの配信者が儲ける金額が決まるため、著作権等の権利を侵害するものや、根拠もなく、時に社会に悪影響を及ぼすような曖昧なニュースを配信するものも少なくない。そしてその他に、誰でも配信でき、多くの PV 数を稼げるコンテンツとして、かわいい猫の動画が挙げられる。ニュースというものは社会に有意義な情報を伝えるものであるものの、現在はニュースよりもネコの動画の方が人気があり、ジャーナリズムの価値が危ぶまれているこの危機的ともいえる状況を表すのが「ネコがメディアを支配する」というタイトルである。

以降は、近代では新聞のような物質的(アトム)な媒体によってニュースを配信するものより、デジタルデータ(ビット)の媒体によるもののほうが主流になってきたことから始まり、メディアの変遷やその必然性などが述べられていく。インターネットがニュースなどのコンテンツを配信するメディアとしてある一定までの進化をしたのちに退化が始まった。ネットニュースの収入は、先ほども述べた通り読者による購読ではなく広告による収入である。そのため PV 数さえ稼ぐことができればとニュースの品質が大きく問われなくなってしまったことで、ニュースサイトに掲載されるニュースが芸能人が作った独創的なお弁当や動物の口内がグロ

テスクであったというような興味は惹かれるが、果たしてニュースと呼ぶべきものであるのか疑問を持つような記事が目立つようになった。これを以って筆者はネットメディアが退化したことを述べている。

これからのニュースは、上記の PV 数を求めるばかりのコンテンツとは隔てて、同じ土俵のものとは考えず、その在り方を模索していくべきであると綴られている。

この本では、ネットの台頭からニュースサイトの設立などの歴史や、新聞などの紙媒体と、ネットメディアとの差異とそれぞれの利点、現在のネットメディアでの利益の出し方などを明確に、わかりやすく述べられている。そのため、インターネットの歴史、なぜ無料でニュースを読めるのかということなどに関して予備知識がなくとも非常に読みやすく、理解も容易であると感じられた。また、この本で取り扱う大きな問題として、冒頭でも述べたようにジャーナリズムの価値の揺らいでいること、ニュースはこれからどのような形で続いていくのかということがある。なぜその価値が揺らぐのかということとは、端的に言えば日常生

活の中の誰でも発信できるようなコンテンツがニュースよりも人気を博したからだと書かれている。そのコンテンツの例として、猫の動画が使われているが、それが読み手の興味を惹くのではないだろうか。専門書は堅く、読みにくいイメージを持ってしまいがちであるが、この本は文体もカジュアルであり、ネットスラングを交えたり、より身近なものを例に挙げることによって理解を促される。このような観点でも読みやすい本であったと思われる。

ネットメディアの現状を知るには良い本であったと評価できるが、悪い点を挙げるとするならばネットメディアが退化している原因や、今後どうなっていくか、どう変わっていくべきかということについては具体的な筆者の意見がうかがえなかった。

総合的に知識がなくともわかりやすく、興味を惹かれる内容でありネットニュースに関して非常に勉強になる本だと感じた。

## 書評とは・・・「書物の内容を批評・紹介すること。また、その文章」(広辞苑)

### <今回の募集要項>

- 応募資格** 本学学部学生、社会人聴講生、市民利用者とする(科目等履修生は除く)。
- 書評対象図書** 原則として初版出版後 5 年以内の本学図書館所蔵の図書とする。
- 書評の要件**
  - ①書評図書の内容の要約または概要が盛り込まれていること。
  - ②書評図書の良い点や悪い点が明示され、それに対するコメントが述べられていること。
  - ③文章の読み易さ、表記の適切さ、文章構成の確かさに留意すること。
- 応募要件**(主要項目のみ抜粋)
  - ・応募作品は応募者の独創的な書評であり、かつ未発表原稿に限る。
  - ・本文は 1,500 字以上 2,000 字程度とする。
  - ・A4 版横書き、全てを 1 ページに収める。本文は、40 字×50 行の設定とする。
- 募集期間** 2017 年 5 月 9 日(火)～9 月 29 日(金) ●**入選発表** 2017 年 12 月 1 日(金)
- 授賞式** 2017 年 12 月 20 日(水) ●**応募点数** 35 点
- 入選各賞**
  - ①最優秀書評賞 1 篇 表彰状および副賞(図書カード 1 万円)
  - ②優秀書評賞 2 篇 表彰状および副賞(図書カード 5 千円)
  - ③佳 作 5 篇 表彰状および副賞(図書カード 3 千円)

☆次年度も開催予定ですので、是非ご応募ください。(過去には連続受賞された方もいらっしゃいます。)

